

杉田観梅紀行文における美辞麗句

——月ヶ瀬梅林と同質化される風景——

湯 本 優 希

一、はじめに——杉田梅林について

杉田梅林は、現在の神奈川県横浜市磯子区の一帯にかつては名勝として栄えた梅林である。

『磯子の史話』（磯子区制50周年記念事業委員会「磯子の史話」出版部会、昭和五十三年）によれば、その起こりは小田原北条氏の家臣であった間宮信繁がその収益を生活の一助とするために梅樹を植えさせた天正年間（一五七三）にさかのぼる。その後、元禄の頃には約三万六千本の梅樹が杉田の地を賑わし、文化・文政年間（一八〇四）には最盛期を迎えた。この頃には「梅花飯」という名物が考案されたという記述が『横浜市史稿』風俗編（名著出版、昭和四十八年）や、多くの資料、紀行文に見られるなど、食文化にも影響を与えていたことがうかがえる。

杉田梅林は土地を彩る多くの梅樹に屏風ヶ浦の景観の美しさが相俟って名勝地として天下に喧伝せられ、明治期において、明治十七（一八八四）年、明治十九（一八八六）年の二度にわたり英

照皇太后と当時の昭憲皇后が観梅のために杉田梅林の中心地であった妙法寺に行幸されたこともあり、人口に膾炙していったのである。

二、杉田梅林と月ヶ瀬梅林

名勝地として杉田梅林と類似した特徴を持つ梅林がある。現在の奈良県奈良市を中心に三重県との県境付近に位置する「月ヶ瀬梅林」である。これまであまり指摘されてこなかった両者の関連性については、拙稿「杉田梅林をめぐって」（『センター通信』第九号、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化センター、平成二十七年三月）において述べたが、本稿における調査の前提となるため、ここでもう一度確認しておきたい。

両梅林は、梅の実を生活の一助とするために植樹がはじめられたことがその起源である。杉田梅林は前述の通りだが、『月ヶ瀬村史』（月ヶ瀬村、平成二年）によれば、月ヶ瀬梅林もこれと同様に烏梅の収穫を目的とした梅林であった。そして名勝としての

両梅林は、ともに梅花だけではなく梅花を圍繞する自然そのものの全景が景勝地として賞讃された。杉田梅林は屏風ヶ浦の景観とともにあり、月ヶ瀬梅林は、「月ヶ瀬梅溪」との呼称もあるように、溪谷を内包しているのである。

このように、その全景をもてはやされた両梅林だったが、『磯子の史話』、『月ヶ瀬村史』によれば、梅樹の減少が危惧されたことから、明治二十三（一八九〇）年に「月ヶ瀬保勝会」が、明治二十八（一八九五）年に「杉田保勝会」がそれぞれ発足されており、明治二十年代以降、ともにその景勝が衰えをみせていったことがわかる。

そのような状況の中、明治期にあつて多くの文人が訪れていることも看過できない特徴である。なかでも特筆すべきは、根岸党と硯友社である。明治期の文人集団を語る上で欠かすことのできない根岸党と硯友社は、ほぼ同時期に、杉田梅林と月ヶ瀬梅林を訪ねているのである。

根岸党の著名な紀行文に「さきがけ」（『東京朝日新聞』明治二十六年二月十四日〜二月十八日）がある。これは明治二十六年に根岸党の面々が杉田梅林を訪れた様子を綴った紀行文である。また、饗庭篁村、幸田露伴による江ノ島・鎌倉旅行を饗庭篁村が記した「女旅」（『東京朝日新聞』明治二十四年三月七日〜三月二十一日）や、饗庭篁村、幸堂得知、右田寅彦らによる紀行文「杉田の梅」（『東京朝日新聞』明治三十三年二月十四日〜二月二十八日）等、根岸党の面々はたびたび「杉田梅林」を訪れていた。さらに硯友社も大橋乙羽「晴好雨記」（『太陽』第二巻第六号、明治二十九年三月）に見られるように杉田梅林を訪れている。

そして、明治二十六（一八九三）年には根岸党、硯友社がそれぞれ月ヶ瀬梅林に遊行し、月ヶ瀬観梅紀行文を綴ったのである。

明治二十六年、大橋乙羽「月ヶ瀬杉田梅見の葉」が『風俗画報』に掲載された。この「月ヶ瀬杉田梅見の葉」には名和永年画「月ヶ瀬杉田梅見の栗図」が付されている。この図は「杉田梅園」が主として描かれ、その上半分に月ヶ瀬梅林の月ヶ瀬村と桃香野村の様子それぞれ挿入されており、杉田梅林を中心とした構図となっている。この「月ヶ瀬杉田梅見の葉」の本文では、その題名に表れているように、「杉田梅園は関東の名所なり」「月の瀬は関西の勝地なり」とあり、杉田梅林と月ヶ瀬梅林が、東西の梅の名所として対比的に描かれていることも見逃せない。

ここで特に指摘しておきたいのは、これらの梅林を天下に知らしめたきっかけが観梅紀行文であったということである。各々の梅林に関する資料の多くに、その梅林が名所となった理由として観梅紀行文の存在が紹介されてきたが、それが杉田梅林と月ヶ瀬梅林の共通点としては注目されてこなかった。

元禄の頃より栄えはじめた杉田梅林は、文化四（一八〇七）年に、儒学者であった佐藤一斎が著わした「杉田村観梅記」により、人々の間に浸透していった。また、同年に清水浜臣が記した「杉田日記」もその後押しをしたといつてよいだろう。

月ヶ瀬梅林も、はじめは周辺に住む人々にしか知られていない地であった。この梅林を天下の名勝たらしめたのは儒学者であった斎藤拙堂の「月ヶ瀬記勝」である。拙堂が月ヶ瀬を訪れたのは文政十三（一八一〇）年のことで、その後「月ヶ瀬記勝」は嘉永五（一八五二）年に刊行され、これにより月ヶ瀬梅林の名は全国に

とどろくこととなった。月ヶ瀬梅林を訪れる文人墨客はみな口を揃えて、『月瀬記勝』を読み、この地を訪れたいと思っていたと綴っている。拙堂『月瀬記勝』による影響は多大なものであった。これと同様のことが、杉田梅林にもいえる。

『東京市史稿』遊園編（東京市役所、昭和四年）には「杉田村梅花」が紹介されており、

四年丁卯正月、儒士佐藤坦梅ヲ杉田村ニ貰入。和学者清水浜臣亦往テ觀ル。是頃都人ノ遊覽者少ナカラザリシヲ推ス可シ。

との記述がある。『東京市史稿』では観梅に関する記述に続き、「杉田村観梅記」と「杉田日記」を引用し紹介している。

とりわけ佐藤一斎の「杉田村観梅記」は、明治期に刊行された案内記の類や地誌、文範などに数多く掲載され、多くの人々の目に触れていた。特に人々の間に広がりを見せていた田山花袋編『新撰名勝地誌』（博文館、明治四十三年）においては杉田梅林の項目に、

佐藤一斎が所謂「村皆白雲世界その巔を極めて俯瞰すれば、花光雲影、遠近相含み、而して海湾晶々然一大鏡を磨き、漁舫その間に往来する」の景頗る賞すべく。

と、佐藤一斎の名と「杉田村観梅記」の一節を挙げている。

いうまでもなく、杉田観梅にあたり、佐藤一斎「杉田村観梅記」を想起している紀行文は数多い。

明治二十九（一八九六）年、妙法寺智旭が永勢子行の協力のもと編集し「杉田勝概」を刊行した。『横浜の本と文化 横浜市中心図書館開館記念誌』（横浜市中心図書館、平成六年）では、「明治の観光案内記」の中の「杉田の観光案内」において、この「杉田勝概」が唯一取り上げられ紹介されているように、杉田梅林を語る上で最も重要な資料のひとつである。この「杉田勝概」は杉田梅林を題材とした詩文集に地誌が付されたものである。

この「杉田勝概」に集められた杉田観梅紀行文のうち、漢文体で綴られた紀行文のほとんどに、一斎の名が登場している。たとえば後藤錦川「杉田村観梅記」（明治十四年）においても冒頭から、「余嘗読愛日楼集。識武州杉田之勝³」と始まるのである。

『杉田勝概』以外にも紀行文において佐藤一斎の名はたびたび挙げられている。大町桂月は幾度も杉田梅林に足を運び、観梅紀行文を記した。その桂月は「杉田の一夜」において、次のように述べている。

憶ふ昔、佐藤一斎の杉田⁴観梅記に感服のあまり、頓に遊意を催して、夜八時、都を出で、明方杉田に着し、その日また直に帰路に就き、一昼夜を全く徒歩して辞せざるまでに思ひこがれたる地なれど⁵。

桂月の杉田梅林への憧憬の原点は佐藤一斎「杉田村観梅記」にあるといえよう。

また、珂北仙史は『風俗画報』に掲載された紀行文「杉田之梅」

において、たびたび佐藤一斎「杉田村観梅記」を引き合いに出している。まず「余佐藤一斎の杉田村観梅記を読み久しく之に遊ぶの志あれとも春々便宜を得ず」とあり、「往時佐藤一斎の遊を省見は亦其不便甚しきを知るへし」など自身の旅程の中で一斎の紀行文を思い出しては、それについて思案している。

さらに同紀行文では杉田梅林の中心である妙法寺を訪れた際には「一斎の記に園曰く」と述べ、一斎の紀行文を漢文体のまま引用してその景勝を賞した。この妙法寺以外にも、たびたび一斎の紀行文を引用している。読者は珂北仙史の紀行文を読みながら、佐藤一斎「杉田村観梅記」における表現によって、その情景を思い浮かべる仕組みとなっているのである。

土居香国「杉田観梅記」が『太陽』（第四卷第十二・十三号、博文館、明治三十一年六月）に掲載された際、石川鴻斎の評が付されていた。その一部が以下である。

始終梅花纏繆。豈与花神有宿縁者耶。夫月瀬拙堂記之。杉田一斎記之。爾来観客多。

ここでは、拙堂と一斎がともに引き合いに出されている。

このほかにも、佐藤一斎の名は杉田観梅紀行文の中で繰り返し登場しており、佐藤一斎「杉田村観梅記」が後世の杉田観梅紀行文に多大な影響を及ぼしたことは明白である。

杉田梅林と月ヶ瀬梅林は、その景色の美しさはもとより、どちらも江戸末期に綴られた観梅紀行文を土台とし、風光明媚な（文学的名所）としての価値を獲得したという、非常に類似した特徴

を持った名勝であった。

三、描かれる（対象）と美辞麗句の展開

杉田観梅紀行文は、杉田梅林が神奈川県横浜市にあることから、その行程は明治五（一八七二）年に新橋―横浜間の鉄道が開業したことに影響を受けている。かつての一斎「杉田村観梅記」から明治期に至るまでの杉田観梅紀行文では、杉田への行程の交通事情は徒歩や船など、さまざまであった。

しかし、明治十九（一八八六）年に刊行された、杉田梅林を中心に据え観光を促した案内記である安田米斎『杉田梅花村誌』（杏雨山房）の「観梅順路」の項目では、「第一線路笹下通」と「第二線路海辺通」という、横浜からのふたつの経路が提示されている。例えば「第一線路笹下通」では「横浜停車場ヨリ二十六丁吉田新田ヨリ六丁蒔田村ヨリ十一丁（中略）杉田村ニ至ル合セテ三里十六丁ナリ」と案内されている。このように、鉄道開業以降は横浜駅から陸路と海路のどちらかの経路を辿って杉田梅林を訪れることが一般的となった。この交通事情の変化は杉田観梅紀行文にもあらわれている。鉄道開業以降の杉田観梅紀行文では、新橋駅の描写から始まっているものが多く、また、新橋駅からでなくとも横浜駅に到着したところから描かれている紀行文がほとんどである。そしてその後、横浜駅から陸路か海路を通り、杉田梅林を訪れた様子が描かれる。

しかしながら、一斎の紀行文から鉄道開業以前までの観梅紀行文においても、杉田梅林にいたるまでの行程が書かれていたこと

は変化していない。杉田観梅紀行文では、一貫して杉田梅林に到着する以前からの様子が描かれているのである。それは、杉田に至るまでの道のりを描くことも杉田観梅紀行文の行程のひとつであると同識されていたからではないだろうか。

こうした杉田梅林と、地勢や行程は異なるものの前述の通り類似性を持つ月ヶ瀬観梅林を題材とした紀行文の美辞麗句表現調査では、月ヶ瀬観梅紀行文におけるトレース表現——踏襲されていた表現——と同様の表現が、明治期に数多く刊行された例句・例文集である美辞麗句集にも見られることを明らかにした。

本稿では、この調査結果に鑑み、杉田梅林における美辞麗句表現の調査を行い、月ヶ瀬観梅紀行文における美辞麗句表現と比較検討したい。

本稿の調査に用いた杉田観梅紀行文は以下である。

- 佐藤一斎「杉田村観梅記」文化四（一八〇七）年◆
- 清水浜臣「杉田日記」文化四（一八〇七）年◆
- 斎藤竹堂「観梅紀行」天保十四（一八四五）年か◆
- 菊池三溪「観梅游記」慶応二（一八六六）年か◆
- 松村西莊「杉田遊記」明治十二（一八七九）年◆
- 後藤錦川「杉田村観梅記」明治十四（一八八一）年◆
- 豊島洞斎「杉田観梅記」明治十五（一八八二）年か◆
- 蒲生聚亭「杉田村観梅記」明治十六（一八八三）年◆
- 依田学海「杉田観梅」明治十七（一八八四）年◇
- 石埼小洲「杉田観梅記」明治二十二（一八八九）年か◆
- 「杉田の梅林（附臥竜梅）」明治二十三（一八九〇）年（発行年）

饗庭篁村「女旅」明治二十四（一八九一）年

大橋乙羽「江南村」「金沢八景」明治二十五（一八九二）年◇

田口卯吉（鼎軒）「杉田観梅記」明治二十六（一八九三）年◇

大橋乙羽「月瀬杉田梅見の栞」明治二十六（一八九三）年

饗庭篁村「さきがけ」明治二十六（一八九三）年

大橋乙羽「晴好雨記」明治二十九（一八九六）年◇

河北仙史「杉田之梅」明治二十九（一八九六）年

吉野左衛門「探梅行」明治三十（一八九七）年◇

大塚楠緒子「杉田記行」明治三十一（一八九八）年

大町桂月「杉田の一夜」明治三十一（一八九八）年◇

土居香国「杉田観梅記」明治三十一（一八九八）年

「杉田の探梅」（佐東子報）明治三十二（一八九九）年（発行年）

根岸党「杉田の梅」明治三十三（一九〇〇）年

大町桂月「春のひと夜」明治三十四（一九〇一）年◇

山川勝具「杉田観梅記」明治三十四（一九〇一）年

大和田建樹「杉田の梅」明治三十八（一九〇五）年

宝水・二葉・朴念仁（横浜同好会発会式）「杉田の梅見」明治三十九（一九〇六）年

以上二十八編（文化四年～明治三十九年）の観梅紀行文において、美辞麗句表現の調査を行った。

これらの美辞麗句表現を追うまに、まず佐藤一斎「杉田村観梅記」の旅程に軽く触れておこう。一斎は文化四（一八〇七）年二月、一斎を含めた三人で連れ立って杉田村を訪ねた。金河駅に投宿し、翌朝程谷駅を出発。一斎らは徒歩で太田村・井戸谷村を

通つて大岡村に至り、その後村々を抜け、杉田村に入る。東漸寺、「善悪居士」という人物の家、妙観寺の山、妙法寺とめぐり、「善悪居士」の家に宿泊し、翌朝は馬で程谷駅に向かい、帰路についた。その後蒲田を通つたおり、蒲田梅林を見ていこうとの声もあるが、観梅は行っていない。

このように、杉田梅林には東漸寺、妙法寺、妙観寺の山といった観梅地点があるが、これらはみな程近い場所であり、特に観梅順路といったものはない。そのため、後世の紀行文においても、観梅地点は同じものの、順路はそれぞれ異なっている。

しかし、杉田観梅紀行文ではこれらの観梅地点において、〈描かれるもの〉が踏襲されていき、それにともなつた表現の踏襲も見られるのである。なお、本稿では、一斎の紀行文に沿つて、描かれる〈対象〉とその美辞麗句の一部を紹介していく。また、同様の表現が多数ある場合には、数例のみを挙げた。

一斎「杉田村観梅記」では、冒頭において

余れ幼き時、家君の杖屨に陪ひ、杉田村に遊びて梅を観る。¹¹

と回想するところから始まる。『佐藤一斎全集』詩文類上（明徳出版社、平成三年）における大垣朝氏の解説によると、ここでの「杖屨」は「老者の出行をいう」とされているが、他の杉田観梅紀行文においては、装いとしての〈杖〉に関する描写が数多く見られる。

例えば石崎小洲「杉田観梅記」には、「値高帽短鞆結伴曳杖者。蓋都人來見梅也」と書かれている。河北仙史「杉田之梅」では観

梅客について「然ども遊観者極めて寥々として真の風流客子にあらざれば杖を曳くもの甚だ少れなりしならん」と嘆いている。また、大橋乙羽「江南村」においては「あはよくも洋杖オウツキに縋り、漸うと山に登れば」と描写されている。山川勝具「杉田観梅記」では、名勝地へ訪れる際の格好を「昔しは文人墨客が。腰に一瓢を提げ。手に杖をついて。細道を辿つて。尋ねて往くと云ふ有様」と、記している。

「杖を曳く」には散歩のほかに「旅をする」の意味もあるが、ここでは、杉田梅林を訪れる観梅客の装いのひとつとして〈杖〉に着目した描写が数多くなされているのである。そこには、風流を解す観梅客は杖を曳くものであるという当時の人々の素養があらわれているといつてもよいだろう。

続いて、一斎は杉田村に至る前に赤穂山に登り、杉田を含む一帯の景色を一望した際、海について次のように記した。

風已に歎み、海面駛したるが如し。

後世の紀行文において、この海面の様子は必ずといってよいほど挿入される。一斎と同じく山に登り屏風ヶ浦の眺望を見下ろす際だけではなく、鉄道開業後、横浜駅から海路を通る際、船の上から海を描写する様子が数多く見られる。

大橋乙羽は「江南村」において、「梅見船」に乗り杉田に向かいながら以下のように著わした。

浪は鏡もて駛せしよりもなほ穩かに、金波のヒラ／＼するは

龍神の花簪を、この沖より奉つるにや、

大町桂月「杉田の一夜」には、

天辺に寸碧を拖く、東風のどかにして、海波颯するが如く、
布帆みな坐するが如し。

とある。また、豊島洞齋「杉田観梅記」においても「波平如颯。白帆往来」と記されており、一齋が「颯したるが如し」と表現した穏やかな海面に関する描写が繰り返されている。

さらに、一齋は杉田観梅のさなか、妙観寺の後方にある山に登り、その眺望を次のように綴った。

其の巔を極めて俯瞰すれば、花光・雲影、遠近に相ひ含む。
而して海湾は晶晶然として一大鏡を磨き、漁艫其の間に往来し、誠に絶景たり。

この表現は、後藤錦川「杉田村観梅記」においても「花光雲影。遠近相含」と記されている。同様に珂北仙史「杉田之梅」では、「花光雲影、遠近相含」など、一齋の「杉田村観梅記」の表現をそのまま用いている。

また、前掲資料『新撰名勝地誌』においても、杉田梅林の項目において、一齋の引用部分を紹介している。

さらに、美辞麗句集のひとつである柏村一介『美文珠玉』（石塚猪男蔵、明治三十二年）には、

花光、雲影、遠近相含む

という美辞麗句が採録されており、この一齋の美辞麗句表現の広がりがかがえる。

また、一齋は、老樹について、次のように表現した。

老樹は一根に七八幹、根圍の合抱を過ゆる者率ど六七章、仆れて復た起ち、起ちて復た仆れ、虬竜の状を成す者有り、半身枯れて花尚ほ繁き者有り、（中略）全幹蒼蘚、樹皮を露さざる者有り、根株蟠屈して獐獸の如き者有り、鉄枝百出し、兵戟相ひ交はるが如き者有り。

その後、松村西莊「杉田遊記」では「蘚苔厚衣。悉成龍鱗老斑。枝清花瘦」と記された。石崎小洲「杉田観梅記」には「蒼蘚如鱗枝々著疎花。如老龍吐珠」、豊島洞齋「杉田観梅記」には「半爲蘚苔所封裏。瘦枝槎枒。（中略）或鱗皺蜒蜿如臥龍」とある。さらに、大橋乙羽「月瀬杉田梅見の某」では杉田梅林の梅樹について次のように記された。

寺の前後は一面の梅園にていづれも古色蒼然たるもの、みれば龍の蟠れるが如きもの虎の臥すが如きもの青苔滑かなる地を染めて落英霜を置くに似たり。

樹木をうねった竜に見立てる美辞麗句は広く見られる表現であ

るが、杉田観梅紀行文では、東漸寺の老杉や杉田梅林の梅樹など、風景の中から、竜に見立てた〈老樹〉と、〈苔〉を取り上げて描写することが繰り返されたのである。

これまで見てきたように、杉田観梅紀行文は佐藤一斎「杉田村観梅記」を礎として発展してきた。その中で、行程や風景、人々の様子などの対象物に関する選別——何を切り取って描くか、何処を賞讃するか——が踏襲されていたのである。

四、通底する表現

杉田観梅紀行文において行程のさまざまな場面で、描かれる〈対象〉が脈々と踏襲されてきたことを、前章まで確認してきた。

この〈対象〉やそれに付随する美辞麗句は杉田観梅紀行文特有の視点から見られ、語られたといつてよい。杉田梅林と月ヶ瀬梅林が、観梅紀行文を土台として人口に膾炙していった、いわゆる〈文学的名所〉という類似点を持つていたことは先にも指摘した通りである。このふたつの地に咲く梅は、特に江戸末期から明治期にかけて多くの文人墨客の訪れをうけ、詩文の題材となっていた。名所としての両者は〈梅林〉であり、それぞれ描かれる〈対象〉の主役が〈梅〉であることは当然であった。

一斎は杉田村に至る直前、すでに姿をあらわしはじめていた梅を見つけ、その香りについて次のように述べている。

既に森村に抵れば、田間に往往梅を見る。幽馥時に来り、人の衣裾を襲ふ。

この美辞麗句に類似する表現は数多く見られる。

齋藤竹堂「観梅紀行」においては、「忽有暗香触鼻」「暗香拂拂襲人」などの表現が散見し、松村西莊「杉田遊記」では「奇芬撲鼻」と表現されている。石崎小洲「杉田観梅記」では「清馥襲人衣」と記されている。大町桂月は「杉田の一夜」で「やがて杉田に近づけば、暗香自から人を撲つに、ゆかしさ限りなし」と述べた。

また、前掲資料『美文珠玉』では、

田間往々にして梅を見る、幽馥時に来て人の衣裾を襲ふ

という美辞麗句が採録されている。

しかし、〈香り〉が、〈人〉や〈衣服〉や〈鼻〉を、〈襲う〉もしくは〈撲つ〉という美辞麗句は、拙堂「梅溪遊記」をはじめ、月ヶ瀬観梅紀行文においても数多く確認できっており、さらにあらゆる美辞麗句集においても採録されている。

このことから、この美辞麗句が、一斎「杉田村観梅記」や杉田観梅紀行文に限らず、すでに人々の間に広く浸透していたことは明瞭である。

次に、一斎が杉田村に入り、「善悪居士」という人物の家に到着した際、その周囲の風景を著わした表現が以下である。

廬を環る皆な梅、其の幾数株あるかを知らず。

これと同様の表現には、松村西莊「杉田遊記」に「不知其幾千百株」、豊島洞齋「杉田觀梅記」に「豊島圍屋繞園皆皆。其塢也。其圃也。亦皆梅。不知其幾百株」との記述がある。

さらに、この表現は、月ヶ瀬梅林を世に知らしめた齋藤拙堂「梅溪遊記」にも登場している。

十村の梅幾万株なるかを知らず。²⁰

拙堂のほか、月ヶ瀬觀梅紀行文においても数多く見られる表現である。ただし、以前の調査では美辞麗句集において採録がみとめられなかった美辞麗句であった。しかし、土地を越えたふたつの觀梅紀行文に同様の美辞麗句が散見するという事実は、その美辞麗句がある程度の広がりを見せていたことのあらわれではないだろうか。

続いて、以下の美辞麗句表現である。

浮動之香。与清淺之水。輝映煥發。又使人在逋仙詩句中。而逋仙詩。²¹（菊池三溪「觀梅游記」）

逋に一村、家として梅あらざるなき処とて、何処ともなく暗香浮動するに心ときめきて仰げば、²²（吉野左衛門「探梅行」）

疎影を映じて月に磨き日に研ぐ、林逋が池水もなければ傍に阿伽井も手水鉢もなし、²³（吉野左衛門「探梅行」）

暗香浮動月黄昏と吟ぜし聲を思ひ出づれば。²³（大和田建樹「杉田の梅」）

ここに連なる美辞麗句は、菊池三溪「觀梅游記」や吉野左衛門「探梅行」において引き合いに出されている通り、林逋（林和靖）の七言律詩「山園小梅二首」の以下の第一首を下敷きとしている。

衆芳搖落獨暄妍
占盡風情向小園
疎影橫斜水清淺
暗香浮動月黃昏
霜禽欲下先偷眼
粉蝶如知合斷魂
幸有微吟可相狎
不須檀板共金尊²⁴

林逋は北宗の詩人で、字は君復、諡は和靖。九六七年に生まれ、一〇二八年に没している。生涯出仕も妻帯もせず、西湖の地続きの小さい島である「孤山」で梅と鶴を妻とこどもだと言ひ隠棲していたという。²⁵

鎌田正・米山寅太郎『漢詩名句辞典』（大修館書店、昭和五十五年）では、この詩の「疎影横斜水清淺／暗香浮動月黄昏」を「名句」として「雑詠」の中の「詠物」の項目の中で、「梅の枝

のまばらな影が、清らかに浅く流れる水の上に、横ざまに斜めにつき出している。梅の香りが、月の沈みかかったほのあかりの中を、ただよいゆれ動いている」と紹介している。

林逋のこの詩は、後世の梅を題材とした詩文に大きな影響を与えた。

これに関して、佐藤一斎「杉田村観梅記」では、一斎が「漫に」作った「賦一篇」の中に、次のような表現がある。

逸たり美人の返魂、緬たり処士の芳躅。清澈に鑑り以て天斜し、岩阿に托り以て蟠曲す。

『佐藤一斎全集』では、「処士」を「林逋をさす」とし、「天斜」については「斜に曲ってさし出る。林逋「山園小梅」詩の「疎影横斜水清浅」の意を取る」と大垣氏が解説している。水面に斜めに曲がった樹木の枝が映っている様子を表現した林逋の詩に基づいているというのである。

一斎は「意を取る」というかたちで下敷きとし、賦一篇を著わしたが、一斎以降、管見の限りでは三番目に古い慶応二（一八六六）年の菊池三溪「観梅游記」では「浮動之香。与清浅之水。」と記され、一斎とは異なり、「逋仙」という林逋の名とともに用いられた。三溪以降においても、林逋が用いたことばをそのまま引用するか、すこしもじつたり入れ替えをしたりするなどして、林逋の詩だと目で見て分かる状態で用いられている傾向にある。

この林逋の「山園小梅二首」を源流としたとされる美辞麗句は、月ヶ瀬観梅紀行文にも見られる。

たとえば近藤芳樹『梅桜日記』（堯韭亭、文久元年）は、和文で記された月ヶ瀬観梅を含む紀行文である。ここでは「疎影横斜水清浅」「暗香浮动月黄昏」とそのまま引用されているため分かりやすい。さらに鈴木弘恭『月瀬紀行』（青木清吉、明治二十七年）においては「花影横斜水清浅。暗香浮动月黄昏」と少しだけもじつて用いられている。

美辞麗句集では、成田秀三・堀田相爾編『新式文章辞典』（文成社、明治四十四年）「時令の部 探梅」において、

疎影横斜暗香浮动

と掲載されている。

このように江戸末期から、〈梅〉に関して、林逋「山園小梅二首」を根底に置き表現していくことは、広く行われていた。

一方で、「梅溪遊記」には、林逋の住んだ杭の孤山について、次のように記されている。

更に之を西土に求むれば、梅花を以て名づくる者は杭の孤山なり。境は蓋し幽にして、花は則ち蓼々たり。蘇の鄧尉は花頗る多く、地は則ち熱鬧。唯羅浮の梅花村のみ峻峰に対し、寒溪に臨み、而して花尤も饒なり。我が梅溪に比すべきに庶幾からんか。

この箇所は「梅溪遊記」の添削者・頼山陽によって加えられた。²⁶ここでは、林逋の詩とともに知れ渡っていた杭の孤山でも、蘇の

鄧尉でもなく、羅浮の梅花村だけが月ヶ瀬梅林に比するにふさわしいと述べられている。こうして「梅溪遊記」が月ヶ瀬梅林を「羅浮の梅花村」とし、後世の月ヶ瀬観梅紀行文においても「羅浮」の名が散見する。また、美辞麗句集においても、梅にまつわる美辞麗句には「羅浮」が見られる。

佐藤一斎「杉田村観梅記」では、「羅浮」の記述は見られなかった。しかし、天保十四（一八四五）年の齋藤竹堂「観梅紀行」から「羅浮神人」の記述が見られる。明治期に至っても、杉田観梅紀行文において、

雅人驛客を当込みたる土地となりて羅浮の仙女も新調の女洋服を着飾り妙法寺の門前に立ちて（山本笑月「杉田の梅」）

先づ屏風が浦に羅浮の夢を結び、帰路御幸村を尋ねて鶏犬の籬下夕陽に立尽し蒲田の梅林に月黄昏の疎影を看んと志しぬ、（吉野左衛門「探梅行」）

と記されてきた。

これらにおいて引き合いに出されている「羅浮」は梅林の地勢や風景にかかわらず、その美しさを書き著わす際に用いられた美辞麗句といつてよいだろう。

五、おわりに——同質化される風景

杉田梅林は、佐藤一斎「杉田村観梅記」が世に広がりを見せた

ことから、その名がとどろくようになった名勝であった。文人墨客に繰り返して愛でられ（文学的名所）の地位を獲得したその地は、さまざまな紀行文に描かれ続けてきたのである。その中で、佐藤一斎の目が見たもの、描写の対象としたものが踏襲され、定点観測のように、時代ごとに人々は同じものを見て、同じように表現してきた。

しかしながら、杉田梅林という（梅）の景勝地として、（梅）に関する表現を追ってみると、香りやたたずまい、梅樹の影といった、杉田という土地に溢れる梅の風景が、月ヶ瀬梅林で描かれた梅と同様の美辞麗句を用いて賞され、同質化していることがわかった。

杉田は月ヶ瀬とは異なり、海を臨む地勢である。そして、東漸寺や妙法寺といった寺院を巡りながら、寺院の内外に咲く梅花を間近に見る。さらに、小高い山からは一面の梅花とともに屏風ヶ浦が一望できる。一方、月ヶ瀬は梅花が溢れる山々に分け入り、山道を昇降しながら観梅し、山間に流れる五月川を渡る際に、梅花に埋もれる後方の山と、同じく梅花に埋もれる前方の山を見るという地勢である。それぞれ、梅花を内包する風景としては異なるものであるはずである。

大室幹雄氏は『月瀬幻影 近代日本風景批評史』（中央公論新社、平成十四年）において、齋藤拙堂「梅溪遊記」について、次のように述べた。

月ヶ瀬の景観が、じかに彼らの感覚にとらえられるかわりに、もっぱら彼らの教養、漢学の修練によって培われた定型的な

風景享受の作法、端的に江戸シノワズリの趣味にうったえかけたのだといいかえてもいい。(中略)すなわち景観のさまざまな諸位相がことばによってとらえられるとき、風景がはじめて成立する。一般的には、景観は自然と人文との相互的關係における相互の働きかけによって形成され、風景は、そのようにして成立した景観と、その景観にたいして取り結ばれた何らかの関連のうちに立つ人の教養との相互志向的な關係のうちに現れてくるものなのだ。そして教養とは、このばあいとりわけてことばなのである。

杉田梅林も、月ヶ瀬梅林も、〈梅〉の〈文学的名所〉として名高い地であり、〈梅〉を描くことこそが最大の焦点である。その際に用いられた「教養、漢学の修練によって培われた定型的な風景享受の作法」とは、つまり美辞麗句であり、江戸末期から明治期にかけての日本における東西の二大梅林であった杉田梅林と月ヶ瀬梅林には、源流を同じくする美辞麗句などのように、同質の美辞麗句の表現体系が見られたのである。このことにより、それぞれの土地が持っているはずの独自の風景を写し取ることは断念せられ、その風景は、ことばの上において均されてしまったのである。

藤井淑禎氏は「森田思軒とスウインホー『北清戦記』」(『移動者の眼が露出させる光景―越境文学論―』弘学社、平成二十六年)において、「TRACE〔踏襲〕」は「紀行文の本質とも宿命ともみなすことができるものなのかもしれない」と述べ、「歌枕」や「名所旧跡」もこの「紀行文の本質に根ざすものだ」とした上

で、

表現面で言えば、同種の対象に対して同種の表現を反復した結果が結晶化した美辞麗句などは、文字通り、「TRACE」の産物ということが出来る。その意味では、いわゆる「名所旧跡」なども単に「TRACE」が積み重ねられた結果に過ぎないのかもしれない、さらには、場所や風景だけでなく感慨も「TRACE」されるとしたら、代々の紀行文の著者たちが異口同音に感嘆の声を発している、などということも意外に当てにならないものかもしれないのである。

と指摘した。

後世の杉田観梅紀行文は、一齋の見た風景を透かして風景を描いている。一齋のことばによって切り取られた風景が杉田梅林を〈名所〉化し、のちの人々は皆そのことばで風景を〈名所〉として成り立たせ続けていた。しかしながら、他の梅林に目を向けると、まったく異なる土地の異なる〈梅〉が、同じことばによって表現されていたことが明らかとなった。「教養」と「反復」によって培われた美辞麗句が、それぞれの土地が持つ特有の風景を同質化させたといつてよい。

さらに、美辞麗句集についても付け加えるならば、本稿において引用した柏村一介『美文珠玉』には一齋の表現と酷似した美辞麗句がともに「春の眺」という項目に二箇所確認できたことから、一齋の「杉田村観梅記」から引用し採録された美辞麗句であるといえるだろう。また、拙堂の「枝枝月を帯び、玲瓏透徹、影

尽く横斜す。宝鈿玉釵錯落して地に満つ」を「梅」の項目に採録している美辞麗句集、島村空花編『美辞錦囊』（矢鳥誠進堂、明治三十九年）なども見られた。

これらの拙堂・一斎の風景描写はともに典故の明記がなく採録されている。前掲の美辞麗句集に限らず、多くの美辞麗句集には典故が見られない。拙堂・一斎の美辞麗句表現は、それぞれの土地から切り離され、「春の眺」や「梅」といった項目に羅列される美辞麗句となっていた。この紙面においてのみいえば、ここでもまた、杉田梅林と月ヶ瀬梅林の風景は同質化されたといえる。

本調査を踏まえ、今後は漢文教育・作文教育に関する調査を行い、美辞麗句の土壤について研究を進めたい。さらには、繰り返し用いられ普及していった美辞麗句の形骸化に関しても、広く考察を進めていきたい。

注

- (1) 引用は『風俗画報』第六十六号、東陽堂、明治二十七年二月に拠る。以下同じ。
- (2) 『月瀬記勝』は、斎藤拙堂が著わした紀行文『梅溪遊記』に拙堂自身の漢詩と画家による挿図を加えた乾巻、同行者の梁川星巖らの漢詩文が集められた坤巻から成る。梅溪史料編集室編『財団法人月ヶ瀬梅溪保勝会創立百周年記念誌 香世界懐古』（財団法人月ヶ瀬梅溪保勝会、平成十一年）によると『月瀬記勝』が乾坤両巻揃って実際に刊行されたのは嘉永五（一八五二）年である。
- (3) 佐藤一斎を指す。
- (4) 引用は永勢実景編『杉田勝概』振風学舎、明治二十九年に拠る。以下同じ。

る。以下同じ。

- (5) 引用は『太陽』第四卷第六号、博文館、明治三十一年三月に拠る。以下同じ。

- (6) 引用は『風俗画報』第一百十号、東陽堂、明治二十九年三月に拠る。以下同じ。

- (7) 日本国有鉄道編『日本国有鉄道百年史』成山堂書店、平成九年。

- (8) 拙稿「月ヶ瀬観梅紀行文における美辞麗句——トレース表現と美辞麗句集——」（立教大学大学院日本文学論叢）第十四号、立教大学大学院日本文学専攻、平成二十六年九月）。

- (9) 主に「杉田勝概」、神奈川文学振興会編『文学者たちの神奈川 神奈川近代文学年表』明治編（神奈川文学振興会、平成三年）および神奈川近代文学館公式ホームページ上の「web資料室」において公開されている、同資料を増補・再編集したもの（<http://www.kanabun.or.jp/material-data/chronological-table/>）を基盤とし、江戸末期から明治期までの行程が書かれている散文を中心に集めた。『杉田勝概』に収載されていたものに◆、「文学者たちの神奈川 神奈川近代文学年表」においてとりあげられていたものに◇を施した。また、ルビに関して「杉田の梅林（附臥竜梅）」（『江戸会誌』第二冊第二号、明治二十三年二月）のあたりから見られる傾向にあるが、以下の引用では省いている。

- (10) 依田学海「杉田観梅」（『学海日録』第五卷、岩波書店、平成四年）では、「頭欄」に「ちなきく、一斎記中には、妙観山にのぼるとあり。即ち此山（学海は「牛背山」「八幡山」と呼んでいる——引用者注）の事ときこゑたり。妙観寺は八幡祠の別当所なり。神仏混淆をやめられし時、寺は廢せし也」との記述がある。妙観寺については、『新編武蔵風土記稿』卷之七十九

(内務省地理局、明治十七年)においても「別当妙観寺」として紹介されている。

(11) 引用は『佐藤一斎全集』詩文類上、明德出版社、平成三年に拠る。以下同じ。

(12) 引用は永勢実景編『杉田勝概』振風学舎、明治二十九年に拠る。以下同じ。

(13) 引用は大橋乙羽『続千山万水』博文館、明治三十三年に拠る。

(14) 引用は『淑女』第三巻第四号、紫鸞社、明治三十四年四月に拠る。

(15) 『日本国語大辞典』第二版、小学館、平成十四年。

(16) 引用は永勢実景編『杉田勝概』振風学舎、明治二十九年に拠る。以下同じ。

(17) 引用は永勢実景編『杉田勝概』振風学舎、明治二十九年に拠る。以下同じ。

(18) 引用は永勢実景編『杉田勝概』振風学舎、明治二十九年に拠る。以下同じ。

(19) 注(4)に同じ。

(20) 引用は村田榮三郎『江戸後期月瀬観梅漢詩文の研究』汲古書院、平成十四年に拠る。以下同じ。

(21) 引用は永勢実景編『杉田勝概』振風学舎、明治二十九年に拠る。以下同じ。

(22) 引用は『ほと、ぎす』第十五号、明治三十一年三月に拠る。以下同じ。

(23) 引用は大和田建樹『紀行文集をちこち』地球堂書店、明治四十年に拠る。

(24) 引用は王雲玉編『国学基本叢書四百種 林和靖詩集』台湾商務印書館、中華民國五十七(一九六八)年に拠る。なお、改行は引用者によるものである。

(25) 竹内実『岩波漢詩紀行辞典』岩波書店、平成十八年。

(26) 「梅溪遊記」には、拙堂に乞われた頼山陽による添削が施されている。大室幹雄氏は『月瀬幻影 近代日本風景批評史』(中央公論新社、平成十四年)において、「刪潤梅谿遊記」(『日本芸林叢書』第二巻、六合館、昭和三年)を挙げ、山陽の添削について、細かに言及している。

(27) 注(4)に同じ。

(28) 引用は「杉田の梅」十一(『東京朝日新聞』明治三十三年二月二十五日)に拠る。

※引用の際、旧字は新字に改め、傍点・ルビ等は適宜省略した。

(ゆもとゆき 大学院博士後期課程在學生)